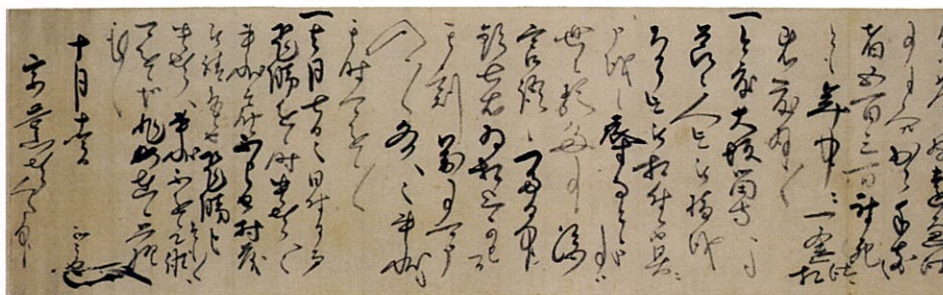
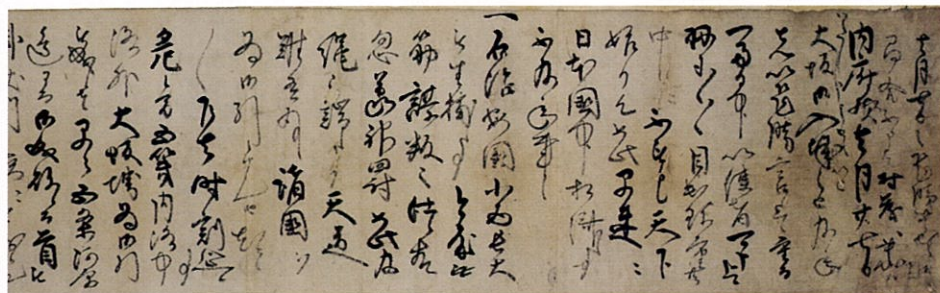


やまとの名品 天理図書館



だてまさむねしよほう
伊達政宗書状

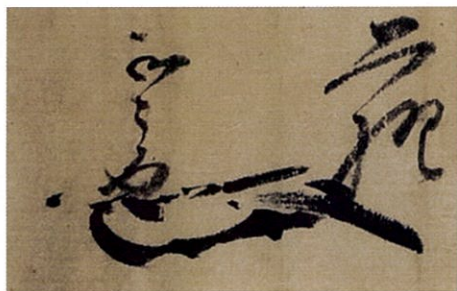
今井宗薫宛

慶長5年(1600)10月14日

縦17.6cm 横2m21cm

独眼竜の異名でも知られる伊達政宗（一五六七～一六三六）は、伊達家十六代当主・輝宗の長男として生まれ、戦国の動乱の世を生き抜き、近世大名へ転身した数少ない戦国武将のひとりである。初代藩主として奥州に仙台藩という大藩を後世に残し、現在へと続く東北一の大都市「杜の都」仙台的礎を築いた。本状は、その政宗が徳川家康側近の茶人今井宗薫にあてた書状で、関ヶ原の戦いより一カ月後のものである。豊臣秀吉に茶頭（茶事をつかさどる役）のひとりとして仕え、また秀吉の話し相手を務めるお伽衆でもあった宗薫は、秀吉の死後家康に接近、家

康の六男松平忠輝と政宗の娘五郎八姫との婚約成立の際も仲立ちをつとめた。内容は、先ず関ヶ原の戦いに勝利した家康の大阪入城（九月二十七日）を祝い、次いで、生け捕りにした石治（石田三成）・安国（安国寺恵瓊）・小西（小西行長）・長大（長束正家）の諸国引き廻しは時刻が延びて危険につき、五畿内・洛中・洛外・大阪・堺の引き廻しにとどめ、早々に京都五条河原で処刑し、獄門にかけるべきことを進言している。



しかし、この書状の発信十三日以前の十月一日、石田・小西・安国寺の三名は、すでに京都六条河原にて処刑されていた。本状は実際には、先方に発送されずに政宗の手元に留め置かれていたものであろうか。伊達家文書の一つ、日付の下に政宗の花押が見える。政宗は武将中第一級の能筆家でもあり、彼の存命中からその名筆ぶりは有名であった。（天理図書館 春木陽一）